



芭蕉翁記念館だより

今年の立冬は11月7日(木)です。芭蕉さんは、冬に伊賀に帰ってきて、新年を迎えることもありました。元禄2(1689)年、46歳のときの芭蕉さんも、長い「奥の細道」の旅を終え、9月下旬には伊賀へ帰り、その冬を過ごしています。

このとき芭蕉さんは、ふるさとの人たちと多くの句会に参加し忙しく過ごしました。なかでも、蓑虫庵で開催した句会には、その準備から関わっていたことが土芳の『横日記』からわかります。ここには、句会でどのような料理を出すのか、どんな風に部屋を飾るのか、芭蕉から土芳に伝えられていることがわかります。

根ぶか雑水、ちやは園風が七りん、茶わん、銘々菓子いりまめ、すみとり紙にしたたむ。

寒い季節、葱の雑炊を準備し、お茶やお菓子の内容など、句会の参加者に対するもてなしの細かな点まで教えています。芭蕉さんの時代は連句という形式で句会を楽しんでいましたが、作品を作りながら、飲んだり食べたりして交流を深めました。

皆さんも、温かいものを食べながら、友達と俳句を詠んでみてはいかがでしょうか。

◆第78回芭蕉祭特別展

「おかえり、芭蕉さん ふるさと伊賀へ。」開催中

12月24日(木)まで

◆ギャラリートーク

11月23日(土・祝)・12月7日(出)

午後1時30分～(要入館料)

【問い合わせ】

○文化振興課 ☎ 22-9621 FAX 22-9619

○芭蕉翁記念館 ☎ 21-2219



明日に向かって ～差別をなくしていくために～

差別事象から見えてくるもの ー人権政策課ー

「部落差別は昔のはなし」「今はもう無くなっている」人権問題を学ぶ機会に参加すると、時折そのような意見を聞くことがあります。

私たち人権政策課には、仕事や家庭、地域での活動など、さまざまな場面で苦しい思いをした人や、生きづらさを感じた人からの相談が寄せられます。その中には差別につながる相談もあります。

ここ数年、部落差別(同和問題)の差別事象が多く発生しています。同僚との会話の中で「部落の人は税金を払っていない」と発言した事象や、同じように職場で「あそこはうるさいところ」と発言した事象などが起きています。

これらの事象で発言をした人は、自分の周囲や同僚に被差別部落(同和地区)に住んでいる人や出身者が居るとは思っていなかったことが、確認されています。

「部落の人は税金を払っていない」という意見は、

過去の同和対策事業など行政の手厚い施策を「不公平だ」という認識から生じている意見ではないかと考えます。

同和対策事業は、部落差別(同和問題)の結果として生じた被差別部落(同和地区)の劣悪な生活環境、貧困や未就学などの問題を解決するための改善、格差是正を早急に実施するための特別な対策であって、2002年3月末をもって、一般施策に移行し、現在では行われていない事業です。

この事業は被差別部落(同和地区)に住んでいる人が税金を払わなくてよいという施策ではないにもかかわらず、被差別部落(同和地区)への偏見が原因で出た発言だと思われます。

部落差別は昔のはなしではありません。無意識や無理解による発言で、同じ伊賀市の市民を苦しめる部落差別(同和問題)をなくすため、一人ひとりが自分の意識に問いかけてほしいと思います。

人権について考えるコラムです。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683 FAX 22-9641 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ

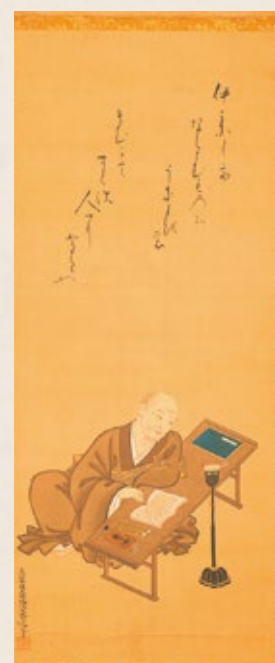
伊賀市の文化財 155

県指定文化財(絵画)
種生 常楽寺所蔵

絹本着色兼好法師像

テレビのクイズ番組で「つれづれなるままに」の書き出しで有名な『徒然草』の作者は誰でしょう?』といった問題が出題されることがあります。解答として「吉田兼好」(兼好法師)が挙げられますが、このときテレビ画面に映し出される兼好法師の姿に、左下の絵画が使われることがあります。

兼好法師の文筆姿が描かれたこの作品は、種生の常楽寺に保管されていて、軸装仕上げ、縦97・9cm、横41・7cm、肉身は墨細線で描き起し、淡紅色の暈取りを施す入念な仕上げです。上部に画讀、左下に落款が記されます。画讀には兼好法師の「いかにして なくさむものを うきよとも そむかて すくす 人とはさや」の句が、落款には「土佐刑部権大輔従五位下藤原光成筆」と記されており、江戸時代の宮廷絵所預となった土佐光成の筆とみられます。兼好法師のこの姿は『徒然草』序段に記された執筆の折の姿とも、



絹本着色兼好法師像

文化財課
☎ 22・9678 FAX 22・9667

第十三段の「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とする」とした姿とも見られます。

この画が伊賀の地にもたらされたのは、兼好法師にまつわる伝承が関係します。兼好法師の生涯は明らかでない部分が多く、晩年も京都双ヶ丘の長泉寺や、鎌倉の上行寺などに住んだとの伝承が残されています。

その一つに、種生の国見山中腹にあつた草蒿寺に庵を結んだとされる伝承があります。『徒然草』が広く読まれる江戸時代には、草蒿寺が廃絶した後もゆかりの地として人々を惹きつけ、松尾芭蕉や服部土芳といった俳人をはじめ、兼好法師を敬慕する人々がこの地を訪れています。

また、この絵画をはじめ掛軸や什器といった文物が奉納され、それは常楽寺に引き継がれ現在に至ります。伝承が、文学的な名所として人々をこの地に誘い、伊賀の地に文物をもたらしただけです。

IGAMONO
伊賀

IGAMONO
セレクション

No.55



忍者かたやき

伊賀名物かたやきは戦国時代、伊賀忍者がさまざまな任務の際、すばやく動けるよう、かさ張らず長期保存できるかたやきを非常食として持ち歩いたとされています。小澤製菓では代々受け継がれてきた味を守りつつ、熟練の職人が1枚に40分かけて鉄板で焼き上げています。味・形にもこだわり良質な小麦粉と砂糖を独自の配合で使用し、焼き上げたかたやきは、目視検品し、袋詰め、個包装など、細心の注意を払い包装しています。

付属の木づちで砕いて口の中でふやかして、伊賀忍者が刀の鏝で割って細かく砕いて食したと言われるかたやきの、堅くて甘く、香ばしい味をご賞味ください。(全国菓子大博覧会 第24回金賞受賞)



小澤製菓(有)
代表取締役
小澤 基広さん

IGAMONO にふさわしい商品作りをしています。伊賀名物かたやき、忍者せんべいなどを製造、卸しています。よろしくお願いします。

【問い合わせ】 小澤製菓(有) ☎ 23-1352



■伊賀ブランド推進協議会事務局(商工労働課) ☎ 22-9669 FAX 22-9695